愛国学園大学人間文化研究紀要　第17号　12～16頁　2015年３月

〔論文〕

白の象徴性－熱田神宮御衣祭の装束調査を通して

早　川　礎　子

1．背景・目的・研究方法

今日、奈良・平安朝の伝統色彩は、神道の祭礼に継承される。それは国風文化の中で創造され、日本人独自の感性が最も表れる伝統色彩の一つといえる。そこには、平安朝で信仰された陰陽五行説を起源とする伝統色彩の象徴性が色濃く継承されている。本稿では神道の伝統色彩の一例として熱田神宮の祭礼における伝統色彩文化を取り挙げる。

(1)　装束の白に関する文献には次のものがある。

熱田神宮の特殊神事[1]の御衣祭は、白い和妙（絹）と荒妙（麻）の幣帛を神に供える祭礼である。これに対して、御衣（神御衣）は、神が着る衣服、神に捧げる衣服である[2]。

川出（1980）は、白色は我朝の貴色で、清浄の色と見做していたと述べている[3]。

神道では白い装束[4]は、大祭を除く中祭、小祭、及び日常の奉仕の場で着用される。

具体的には、斎服の袍・差袴の純白[5]、浄衣の袍と差袴・狩衣の袍、白張の白色がある。斎服は、純白練絹で、他の装束の白と区別される。小祭の装束の袍は白色で、小祭・恒例式（遥拝・大祓）は、白衣を着用後、上衣として狩衣または浄衣を着用する。

浄衣は白絹の狩衣であり、清浄を意味し、小祭・恒例式に着用する。白色無文で往昔より、清浄な衣服の一つで上皇をはじめ一般に至るまで神事や社参に用いた。その他の祭員の白い装束は、明衣、下級者の白張である。

具体的には明衣は、古来、神事服として用いられたもので、上衣、下衣共に純白の白絹である。白張は白色で、布を白粉張りの狩衣で神職の資格のないものが着用する装束である[6]。

観察調査によれば、純白とは白に比べて視覚的には光沢感に相違点がある。このように白が素材の違いによって着分けられており、純白が白よりも上位の色であることが読み取れる。しかしながら、装束に触れることが禁じられている調査の中では素材について文献を参照することに留まる。

(2)　正中に関する文献には次のものがある。

神社本庁教学研究所（1996）によれば、祭礼の方位は四方位（五方位）それぞれに陰陽五行説との対応関係があり、中央の方位は尊貴と見做されている[7]。

また、神前に近きを上位とすることが示される[8]。ここから、神と方位が対応していることが読み取れる。ここから、上位の方位は神に近いと見做されていることが読み取れる。参進においても、上位は常に示されており、神の方位を参進の中心においていることがわかる。

(3) 御衣、神御衣に関する文献には次のものがある。

安江（1978）は、御衣は御神体であると述べている[9]。また、御衣との関係を田中（2010）は、御衣を奉る、御衣を新たにすることにより、神威が更新されるところ重要な意味があると述べる[10]。ここから、御衣と神が対応していることが読み取れる。

しかしながら、これらの研究は、色彩、方位、御衣と神の関係に分かれ、白の装束の序列性と方位については考察されていない。本稿では、御衣祭の白の装束の序列性と、白の幣帛と方位について考察することを目的とする。研究方法は、文献調査と観察調査、聞き取り調査に拠る。

2．結果・分析

毎年5月13日に行われる御衣祭は幣帛、和妙（絹）と荒妙（麻）を神に供える祭礼である。延喜式には、装束の光沢から明妙、照妙の称もある。

午前10時半、斎館前庭に、純白の斎服を着用した宮司・権宮司が西上南面に、純白の斎服の禰宜以下祭員が西上北面に列立する。

「上」とは、職階の高い神職の順を示す。つまり、宮司、権宮司は西から並び、南に顔を向ける。禰宜以下祭員は西から並び、北に顔を向けている。神に近い方位を上位とすることから、宮司、権宮司が列立する方位の西上北面が上位であることが認められる。

祓所で宮司以下祭員は北上西面、祓所役は北上東面に並び、本宮へ向かい、参道の中央の方位である「正中」を除いて参進する。北の方位は、本宮のある方位であることから、神へ向かって上位の職階から列立していることが窺える。この正中を除く参進は祭礼、日常共に行われる。

これについての熱田神宮の神職への聞き取り調査によれば、正中の方位とは神の通る方位であるため、除かれると述べており、全ての神職の共通認識になっていることが窺える。

午前11時、白衣と浅黄の袴の前導所役を先頭に、「大一御用」[11]の幟をもつ白衣に白袴の者、真榊をもつ浄衣の神職と、神職の資格のない白張の者、純白の斎服の祓所役、浅黄色の狩衣の楽士・伶人、御料札の白張の神職の資格のない者、白の幣帛の和妙御料、荒妙御料をもつ浄衣を着用した神職、白衣に緋袴の巫女、純白の斎服の神職が続く。

その後、奉献使、御衣奉献副使、神御衣奉献会会員・稚児行列が第三鳥居を経て本宮に進む。この時、中祭の礼装の斎服が、小祭の常装の浄衣より先導しない。このことから、白の幣帛よりも斎服が上位とされていないことが読み取れる。

第三鳥居を超え、列の並び替えがあり、緋の単衣に白い狩衣の神職、伶人が前方、幣帛の入った柳筥、純白の斎服の神職の順になる。このことから、白の幣帛よりも礼装の斎服が上位とみなされていないことが読み取れる。柳筥上には白い布が掛けられ、髭、髻、御手

玉緒、針、縫糸、力子、御尺、蓑笠が一緒に奉られる。御手玉緒、針、縫糸があることから、白い幣帛から神御衣を仕立てることが窺える。その列は、本宮に正中を除かずに参進する。本宮では、宮司以下祭員、正中である中重版の所定の座、東上北面に列立し座る。

次に、神饌を供し、祝詞を奏上、白張が幣帛を辛櫃から取り出し、権宮司が、御衣御料を点検、玉串を奏し、御衣御料・神饌を徹し祭礼を終える。

最初に、前導所役が前導し、本宮から退出する。次に、斎館前庭に、宮司・権宮司は西上南面に、禰宜以下祭員は西上北面に列立し斎館に入る。そこから、本宮の北に近い上位の方位は、宮司、権宮司の列立する上位の方位であるとが読み取れる。

3．考察

(1) 白の装束の序列性

以上の結果をまとめると、次の表の通りであった。

A表　御衣祭の装束の白

	色　名	素　材	装束の名称	階層の区別	着用者
装　束	純　白	練　絹	斎　　服	無	宮司・権宮司・禰宜・権禰宜・神職の資格のない者
	白	絹	浄　　衣	無	
	白	木　綿	白　　張	無	
幣　帛	白	絹	単　　衣	無	神
	白	麻			

B表　中祭・小祭の装束の白

	色	素　材	装束の名称	職階の区別	着用者
中祭の装束	純　白	練　絹	斎　　服	無	宮司・権宮司・禰宜・権禰宜
小祭の装束	白	絹	浄　　衣		

A表・B表の比較から次のことが分かった。

A表とB表の共通点は、それぞれの装束の素材と装束の名称は対応していることである。つまり、色名、装束の名称、素材は一貫している。また、神職の職階による階層の区別はなかった。更に、白を表す色名は純白と白のみの表記であることがわかった。

A表とB表の相違点は、A表では、一つの祭礼に三つの装束が着用されているが、B表では一つの祭礼に一つの装束が着用されている。これは、装束の素材と装束の名称には序列があり、色名は白であっても、素材と装束の名称が異なることにより、序列が変化することが分かった。装束の名称が同一であっても、素材による序列があると考えられる。

熱田神宮の神職からの聞き取り調査によれ

ば、神職の一生は「白から始まり白で終わる」と述べる。これは、神職が共通して知っている白という色への象徴性であると考えられる。具体的には、神職の資格をもたないものが着用する白張の木綿の白袴から、職階の最上位の特級の資格をもつ神職の絹紋入りの白袴を表している。ここから、素材（練絹・絹・木綿）と装束の名称（斎服・浄衣・白衣）により、白が区別され、序列に分かれていると考えられる。

(2) 白の幣帛と方位

正中は神の方位とされ、正中から白の幣帛は本宮に入ることがわかった。正中に幣帛が置かれることから、幣帛は、御神体と対応しているのではないか。正中とは、神前に近い位置が上位、神前から遠い位置を下位と呼び、職階ごとに列立する。正中では中心から右から左と職階の上の者から交互に列立する。このことから、上、正中が最も上位の位置にあり、神職は、それを意識した列立、着座になっている。神職は中心＝神を常に意識し、方位で神の存在を暗示していると考えられる。

「祭場の位次（一）神前に近きを上位として、遠きを下位とす（二）正中を上位とし、左を次とし、右を其の次とす」[12] とされ、祭礼での神職の列立、着座で「上」とされているのは神前に近い位置であることが考えられる。このことから、方位と神は常に対応し、祭礼の中で神の方位を常に暗示していると考えられる。また、「木、火、土、金、水を色彩で表すと、「青、赤、黄、白、黒」の順序になり、方位では「東、南、黄、白、黒」の順序になり、「東、南、中央、西、北」を示すので「土＝黄＝中央」が最も尊貴である。殿内装飾の四神旗に描かれている四方位の霊獣も、五行に配されており、尊き中央を除き、「東は清龍、南は朱雀、西は白虎、北は玄武」とされ、このことから中央の方位は尊貴の象徴であり、尊き方位のために除かれていると考えられる[13]。すなわち、正中を除き参進し、正中である中重版を除いて、神職が右、左と着座することにより、尊き方位の中央とは正中ではないかと考えられる。また、「太一」は、北極星の神霊化と陰陽五行説では理解される。北極星は宇宙の中心とされ、北極星の神霊化が宇宙神・太一である[14]。「大一」は「太一」と対応し、北極星の神霊化と陰陽五行説で理解されることから中央の方位と対応すると考えられる。中央を表示する正中を参進することと、正中の方位を示す大一御用の旗を表示していることから、白の幣帛と、神との対応関係があると考えられる。

4．結論

以上明らかになったことをまとめると、次のようになる。

(1) 祭礼の装束の白は、装束の名称別、素材別に着分けられる。その装束の白の素材には、斎服の純白の練絹と、浄衣の白の絹、白張の白の木綿の区別があり、斎服の純白と、浄衣と白張の白は、色名と素材で区別され、浄衣、白張の白の色名は同一であるが、素材で区別される。装束の名称と素材が異なることにより、序列が変化すると考えられる。

(2) 白い幣帛[15] は参道の中央の方位に置かれる。その列の並びは、正中は神が通る道と見做され、祭礼、日常空間で常に除

かれる方位であるため、その正中に、幣帛が置かれることは、神と対応関係があるのではないかと考える。

このように本稿では、白の方位と序列の象徴性について指摘することができたが、他の祭礼との比較事例については十分に議論することができなかった。そのためには、神道における伝統色彩文化についてより詳細な調査を行うことが必要である。これは今後の課題としたい。

注

1）神道の祭礼は、大祭・中祭・小祭・特殊神事に分かれる。特殊神事とは神社独自の祭礼である。

2）御衣を奉る祭は、全国にも数多く見られ、知床半島では羽豆神社・富具神社日長神社で行われた記録がある。また長門国住吉神社の御斉祭や、上野国貫前神社の御戸開神事のように、その祭自体が御衣祭というわけではないが、付属する神事として御衣の奉織・奉献が行われる場合がある。しかし、取り分け御衣祭と呼ばれるのは、大神の御料（神御衣）を奉献する伊勢神宮、熱田神宮に奉る祭礼

3）河出清彦：神社有職、河出清彦先生喜寿祝賀刊行会編、太洋社、p233、1980

4）装束とは祭祀に奉仕する際に身に着ける服装

5）八束清貫：校訂装束と衣紋、p20、2003　通説では白と純白は観念に拠る白の色名

6）熱田神宮文化課：祭りへの誘い－装束と神宝－、熱田神宮宮庁、p18～25、2001

7）神社本庁教学研究所編：神道のいろは　神社とまつりの基礎知識、p46～47、神社本庁、1996

8）神社本庁、神社祭祀関係規程附解説、神社新報社、p50～51、昭和47年

9）安江和宣：「御衣振動に関する一考察」、皇學館大學論叢、皇學館大學人文学会、p30、1978.4

10）田中天美：「御衣祭についての一考察－熱田神宮・氷上姉子神社を中心にして－」『神道史研究第五十八巻二号』、p104～123、2010

11）熱田神宮主任研究員によると「大一」は「唯一」という意味と述べる。

12）神社本庁、神社祭祀関係規程附解説、神社新報社、p50、昭和47年

13）神社本庁教学研究所編：神道のいろは　神社とまつりの基礎知識、p47、神社本庁、1996

14）吉野裕子：陰陽五行と日本文化、大和書房、p19、2004

15）幣帛は古来、和妙、荒妙といい、何も染めていない色という意味で、白とされる。